

# 清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第40号

2018年1月20日

## マタイ受難曲 各論-11 (第40, 41, 42, 43曲)

### 第40曲 コラール「たとえあなたから離れても」(4声体単純コラール、4/4拍子、イ長調)

痛切なアリア「憐れんでください、私の神よ」がロ短調の主和音で終わると、ヨハン・リスト作詞のコラール「雄々しくあれ、我が心よ」の第5節が、明るいイ長調で歌い出されます。ペトロの心中を思えば涙なしには聴けないアリアのあと、音楽は一転して信徒の固い決意を表明します。とはいってもこの決意は一過性の激情に駆られたものではなく、穏やかな中に強さを秘めたものです。歌詞は「私は必ず戻ってきます。(中略)私は犯した罪を否定しません。貴方の恵みと慈しみは、私の罪より遙かに大きいからです」と、イエスに全てを委ねています。「私はイエスの許で目を覚ましていよう」と高らかに歌う第20曲のアリアはいかにも凜々しく聞こえますが、その誓いがもろくも崩れて三度主を否んだペトロの激しい悔恨の後では、声高な決意表明よりもこのコラールの方がより聴く者の心にしみこんでくるようです。が、ただ一ヶ所「私は罪を否定しません」(Ich verleugne nicht die Schuld)だけは決然とした表現がふさわしいと思います。また、このコラールは「マタイ」全曲中一度しか使われませんが、かえってそこに「ここぞ」というバツハの意図を感じます。

### 第41曲 ユダの最期(エヴァンゲリスト、ユダ、祭司長・長老たち)

夜明けと共に祭司長・長老たちはイエスを縛り、死刑に処すためローマ総督ポンティオ・ピラトに引き渡します、この時代ユダヤはローマ帝国の植民地であり、裁判権を持っていたのはその支配者でローマ皇帝の命を受けた総督ピラトであったからです。イエスを売ったユダはこの成り行きに後悔し、祭司長・長老たちに銀貨30枚を返して言います「私は悪事を働いた、罪なき血を売り渡したのだ」と。しかし彼らは「知ったことか、おまえの問題だ(Was gehet uns das an? Dasiehe du zu!)」と言って相手にしません。二重合唱で書かれた第41曲 b は、合唱Ⅱ(祭司長たち?)が冷たく言い放つ「知ったことか」を合唱Ⅰ(長老たち?)がオウム返しにまね、続けて「おまえの問題だ」と二度にわたって突っぱねます。そこに合唱Ⅱも合いの手を入れ、ついに進退窮まったユダは銀貨を神殿に投げ込み、外に出て首を吊って自殺します。祭司長たちはその銀貨を拾い「これは血の対価だから神殿の収入にはできまい」といって、のちに「血の畑」と言われる畑地を買います(第43曲)。

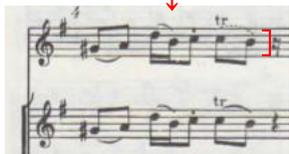
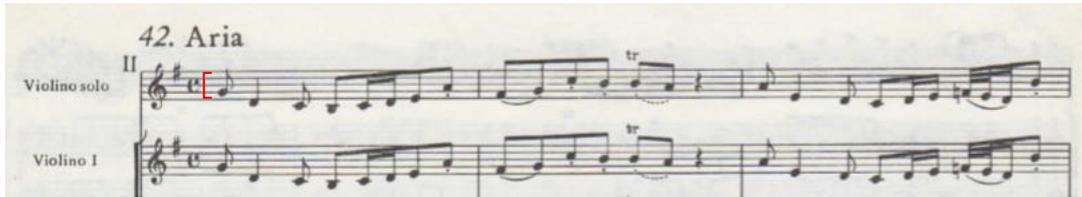
### 第42曲 アリア「私のイエスを返してくれ!」(バス、ソロヴァイオリン、弦楽、通奏低音、4/4拍子、ト長調)

バスの声とヴァイオリンをソロパートとする二重協奏曲の形式で書かれた、音楽的には分かりやすいもののちょっと解釈の難しいアリアです。テンポの指定はありませんが音の動きからしてアレグロで、妙に明るく活発な音楽です。歌詞の切実な訴えと曲想が離れているのです。5-6小節のソロヴァイオリンが奏でる32分音符の順次進行はユダの投げた銀貨のコロコロと床に転がる音だという解釈もありますが、果たしていかなのでしょうか。そして歌詞の「私」とは誰なのか、というような問題により昔から議論の多い楽曲でした。このアリアを否定的に評価する学者もいて、演奏に当たって割愛されることもあったようです。しかし現在では「私」はユダのことであるという解釈が有力です。この問題については磯山雅氏が「マタイ受難曲の最も重要な楽曲のひとつ」という評価を与えて、10ページに渡る論考を繰り広げています(「マタイ受難曲」p.321-330)。

テオドール・ヤコービは「楽しく、喜ばしげな」このアリアの性格を、ヘンデルを例にとり「勇敢で戦闘的な」

と解釈すれば疑問点は氷解する、と述べています(「マタイ受難曲解題」日本オラトリオ連盟訳、私家版 p.139)。

彼は続けてこのアリアにおける数の象徴にも触れていますのでそれを紹介すると、主題の音が30あり、これがユダの投げた銀貨の数に符合する、よってこのアリアの主体「私」はユダに他ならない、と主張します。



(新バッハ全集版「マタイ受難曲」第42曲冒頭部分、[ ]内の音符の数は31個)

(T. ヤコービ「マタイ受難曲解題」に引用された第42曲の冒頭部分(旧バッハ全集版?)。音符の数は30個)



しかし筆者が楽譜(新バッハ全集版)を確認すると音符の数は31になっていました。不思議に思ってヤコービの著書が引用している楽譜を調べてみると左の通りで、ここでは音符の数はちょうど30です。新全集にある↓の音

がないためです。この著書が書かれた1950年代(原著の出版は1958年)、まだ新バッハ全集版による「マタイ受難曲」は発行されていませんから、当然引用楽譜は旧全集によるものに違いありません。ヤコービは別の数字を扱う中では「これは偶然かも知れない」と断りを入れていますが、どうやらこの30という数字も偶然の産物でしょう。しかしヤコービは引用楽譜の×印を示して「バッハは30という数字を実現するために、音楽的には意味のない32分音符を挿入したのだ」とまで言っているのですからかなり強引な解釈です。

同じ音型を繰り返す時、装飾音を入れるというのは当時の演奏習慣でしたが、バッハは本来演奏者に委ねられていた装飾も**全て楽譜に書き込む**という「癖」がありました。ヤコービが「意味のない」と切り捨てた音も、装飾音と考えれば決して不自然ではありません。「数による象徴」はバッハの音楽に数多く見られますが、偶然の可能性も考慮すべきであり、その解釈には慎重さが求められます。

歌詞は短いもので「私のイエスを返してくれ！見ろ、殺しの報酬である金(かね)を、放蕩息子がおまえたちの前に投げ出した」と繰り返します。ソロヴァイオリンと弦楽器、そして低声(バス)を使うという共通点で、第39曲(アルト)と対をなす楽曲でもあります。

### 第43曲 総督ピラトの審問と磔刑判決-1(エヴァンゲリスト、イエス、ピラト)

エヴァンゲリストが「血の畑」の購入はエレミヤの預言の成就であることを告げた後、ピラトの審問場面となります。ピラトは祭司長らの告発理由を確認すべく「おまえがユダヤ人の王なのか」と問いますが、「貴方がそう言っている(Du sagests)」(婉曲な否定)と言ったきり何も答えません。沈黙するイエスを見てピラトは不思議に思うばかりです。このイエスの対応は大祭司カイアファの尋問の時と同じで、質問には直答せず相手に言質を取らせません。しかも一言発した後は同様に沈黙を守りピラトを困惑させます。もしもイエスが「ユダヤの王」を自称するなら、それはローマの支配に対する反乱であり、死刑に当たる大罪になるわけですが、そうでなければイエスを告発した者たちの思惑を知っていても、総督として死刑判決を下すわけにはいきません。イエスに対するピラトの語りかけには、彼を助けようとする好意的な響きがあります。

【後記】 年が明けて練習にも一段と気合いが入ってきました。本年最初の楽事通信をお届けいたします。今年も「清水ヶ丘の風」をご愛読いただきますよう、お願い申し上げます。(新井治男)

